

談話室

新型コロナ禍における 学生生活の実態 —いま学生が社会に求めること

高等教育無償化プロジェクト FREE京都 小島あずみ

はじめに

高等教育無償化プロジェクトFREE京都(以下、FREE京都)は、2019年11月に京都府内の大学生によって設立された。「高等教育無償化」と「給付型奨学金の拡充」を求めて、政治や社会に学生の声を届ける活動を行ってきた。コロナ禍の下、新型コロナウイルス感染拡大に伴う学生の実態調査を2020年4月から行い、学生の声を京都府や京都市、国など、政治や社会に届ける活動を行ってきた。コロナ禍で学生がどのような学生生活を送っているのかを可視化させることで、「学費の高さと、それによる生活苦」しかし「大学を卒業しなければ、就職に不利になってしまう」と、学生がどんどん追い詰められている状況を社会に伝えることができたと考ええる。

1 学生生活実態調査の結果

2020年4月21日から5月31日まで、「新型コロナ感染拡大の学生生活への影響調査」を行った。Googleフォームを用いてアンケートに回答してもらい、さらにSNSや学生マンションへのチラシの投函を行い、回答を募った。その結果、全国の75の大学・短大・専門学校から590件の回答を集めることができた。

例えば、「アルバイトはやっていますか」という設問に対して45.0%の学生が「コロナ問題

でアルバイトがなくなった」「(バイト)をやりたいが見つからない」と答えている。「コロナウイルスの感染拡大による影響で収入はどうなりましたか」という設問に対しては、37.6%の学生が「収入が減った」、31.9%の学生が「ゼロになった」と答えており、学生自身の収入の減少が見られた。また、「アルバイト収入は使いますか」という設問に対し、89.8%の学生が「生活費」、34.2%が「本」、22.4%が「学費」、19.5%が「奨学金返済のための貯金」と答えており、現在の学生にとってアルバイト収入が学生生活を続ける上で不可欠なものになっていることがわかる。

「アルバイト収入減や保護者の収入減などで大学等をやめることを考えていますか」という質問に対して「少し考える」の16.6%、「やめたいが休学を検討している」と答えた3.7%の学生等を含めると、24.7%、4人に1人の学生が学業を中断するか、それを考える状況に追い込まれていることがわかった。

そしてオンライン授業により、人との交流が減ったことで精神的に支障をきたしているという声も届いた。「日中、月曜日から土曜日までずっと家で1人だから人と喋る機会がなく鬱になりそう」(私立大学/1回生)、他にもサークル活動が再開できない中、友人ができなかったり、質問ができる友人がいなかったりしたことなどで鬱になってしまった1回生もいた。経済面だけでなく、精神的な支援の必要性は4月初頃からあったのではないかと。

2 政治に声を届ける

FREE京都は、以上のような結果をまとめ、分析を行い「FREE京都による緊急提言」(2020年5月8日)を発表した¹⁾。実態調査の結果と緊急提言を用いて、市や府の行政、また市議会や府議会に議席を持つ各党派と懇談を行った。その結果、自宅でオンライン授業を受けられない学生のために公共施設を開放、そしてそのス

スタッフとして働く学生を京都市がアルバイトとして雇用、その他にもアルバイトがなくなった学生を京都府・京都市が短期雇用職員として採用することなどが行われた。また、就職活動の状況を調べる実態調査を京都府と京都市が合同で行った。

このような一定の成果は得られたが、学生の経済的困窮の根本原因である学費の問題に関する政策は未だに手がつけられていない。それは京都府、京都市だけでなく国においても同じである。「学びの継続のための学生支援緊急給付金」制度が作られ、困窮学生に対して10万円、もしくは20万円の給付が行われたが、その制度はたった一度学生に現金が配られただけであり、経済的困窮の根本的解決になったとは言えない。それでも、京都において学生を対象とした政策が行われたことは画期的なことでもある。ある府会議員からは、「学生支援という名で政策が作られたのは初めてだ」ということを言われた。FREE京都が掲げる「高等教育無償化」には程遠いが、一歩ずつ前進している。

3 後期の学生生活の実態

FREE京都として9月30日から12月4日まで「秋学期 新型コロナウイルス影響調査」調査を行い、改めて学生生活の実態把握を試みた。Google フォームや授業内でアンケート調査を行い、京都府内で136件の回答を集めることができた。その結果、今の状況が、4・5月と比べて「悪くなっている」、「多少悪くなっている」（4・5月の経済状況が「苦しかった」、「やや苦しかった」学生の「変わらない」も含む）学生は合計で33%にも上った。また、コロナ禍での健康状態について43%の学生が「孤独を感じる時がある」を選択していた。

対面授業が週3日以下の学生は67%に上り、そのうち15%の学生は対面授業がないと回答している。また、サークル活動も多くの大学で制限されていたり、世間による「学生バッシン

グ」を恐れて、人と会うことを自粛していたりするのが学生の現状だ。豊かな学びを得るためには、心と体の余裕が必要なのではないか。経済状況と合わせて、学生のメンタル面でのサポートが前期よりも強く求められている。

おわりに

新型コロナウイルス感染拡大によって、多くの学生が学問の継続の危機に立たされる中で、FREE京都は、学生の声を社会や政治に届け、実際に動かしてきた。しかしまだ世論を動かすまでには至っていない。大学生を取り巻く状況は40年前50年前とは大きく異なっており、大学生の置かれている状況について無理解な声も多い。「金がないやつは大学行かないで働くのが常識」、「自分で大学選択しておいて支援なんか求めるもんじゃやない」というような声がFREE京都に届く。

経済的・政治的理由にとらわれずに自由に学ぶことができることは、学生本人だけでなくその学生が暮らす社会、国が豊かになることにつながる。何かと「自己責任論」「自助・共助」が強調される社会が、10年後、20年後豊かになっているはずがない。今後この社会を担う存在である学生が社会から見放されてしまったら、将来今の学生が社会に出た際に、今度は自分が社会のために働こうと思えるのだろうか。

注および引用文献

- 1) FREE京都による緊急提言：
<https://freekyoto01.wixsite.com/info/proposal>
(2020年5月8日)

(おじま・あずみ：立命館大学文学部)